

972

手訂書
倭文
釋迦
八相



第二編
上の巻

花笠文京重訂

釋迦八相

也本と

文庫

斯文堂
梓



重訂 釋迦八相 文庫第二編の序

開も該倭文庫の萬亭應賀氏の著として總体いろは文字を以て編成られし往
 時合巻中の巨擘として汎く江湖に持離され書肆の米櫃を満しめたる有名草
 紙あるものか、近來傍訓新聞の世に出来るや幾分か文化の進みと見え婦女
 童幼も自ら難解き文字を讀み慣て條理とか判然とか陳芬漢語の早合點耳
 學問の流行するより往時大に喝采されし假字計の合巻の却々讀惡しと捨
 て之を顧みざるに至る遮莫此倭文庫の其趣向の巧妙ある其脚色の面白き能
 く勸懲の意に適ひ釋迦一世の方便を作者に直なる筆に摸し童男童女を誘導
 する世に難有き草紙なれり故を温て新しきを知ると土手物買に能く似たる
 書肆の需に應賀氏の作を其儘重訂し現時流行の活版に付して作り出せし此
 册子亦まんざらでないぞへと云ひ則ち善巧方便まづ書肆に勢ひつけんと
 是でも序ぢやと戯れて述べ

花笠文京 記



山崎小波





興書釋迦八相倭文庫貳編上之卷

東都 萬亨 應賀原著
花笠 文京重訂

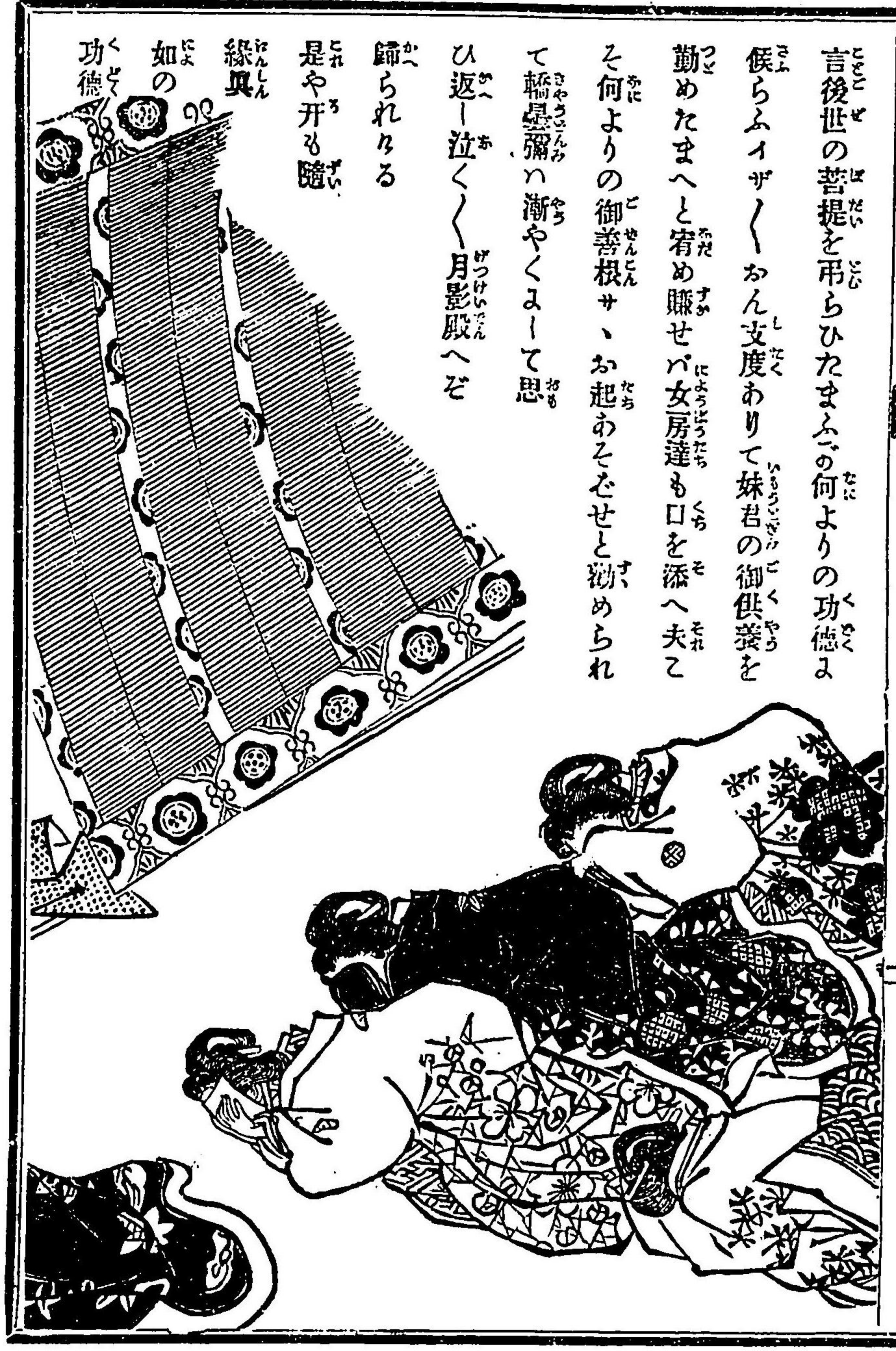
第三回

有左程は摩耶夫人の坐したまふ御頂上へ虚空より金色の光明を放ち幡二流天降りて從婆羅樹の梢より止まり異香芬々として寶相の淨土も斯やあるらんと思ふをりうらふ夫人の御衣をかきわけつゝ左の脇よりアラ尊とや太子誕生まゝくければ帝を始め奉まつり優陀夷夫婦次々まで喜びひ勇み氣も浮立ち殊も御園の面といひ俄の御安産よとりあへず屏風お褥お枕を運搬ぶさへ跡や先慌忙まどへる其中よ今まで二流と見えたる幡の忽ち金色の龍と變じ功德の水を降しつゝ太子及び摩耶夫人の汚穢を清淨し洗除して雲霧く雲へぞ昇りたる恚り一程も降誕まゝくたる太子の前へ三足後へ四足歩みたまひ左手の指みて天をさし右手の指みて地をさしつ天上天下唯我獨尊

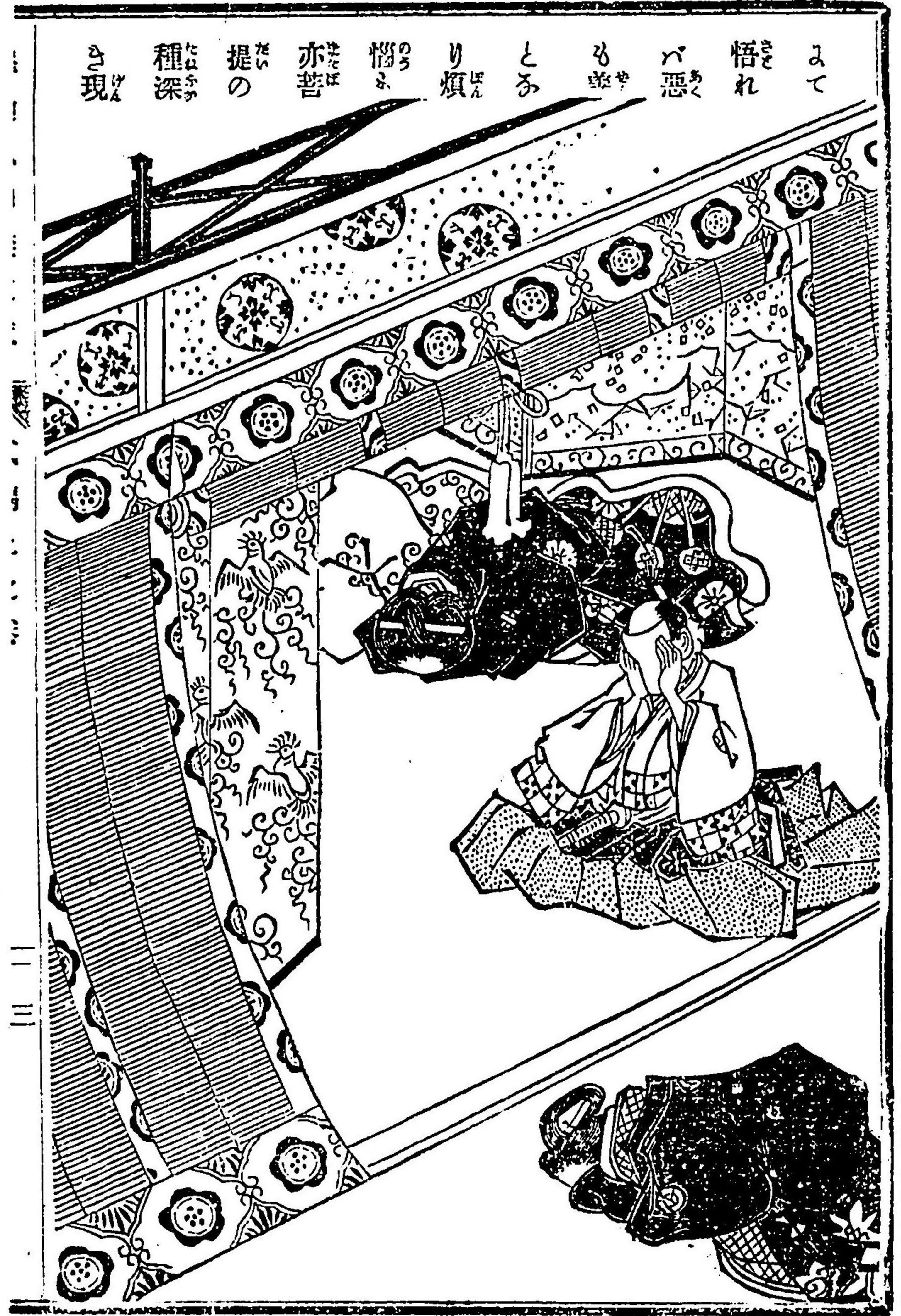
の形を作りたまひてより母堂の膝は安座まゝ乳房を探り索ねたまふ去れば産れ兒の初聲を
聴とさし總て婦人の産み掛りて一生の苦悶も忘れ力付くものかれと摩耶夫人のさる氣色もさく
只雨は萎める花の如く打ち萎れたまふよぞ優陀夷夫婦の忙て太子を抱き取り豫て召抱へられ
たる乳母上臈達へ渡りければ一同の大切お侍さて玉簾の内へぞ入れ奉まつる儲又摩耶夫人をバ
お梅のまゝ揺れざるやう静お御居間へ移とべーと優陀夷夫婦の指搦は任せ夥多の女中勞はりて
奥へ手腰よて昇移し御機嫌の程を窺がひけるよ尙ほよろしくらぬ御容体ゆゑ誰彼の差別さく眞
藥共残らず御脈を診けるよさるゝ首を傾むけて御大切く許り言上させバ帝の更さる優陀
夷夫婦命婦其外末々の者までも太子御誕生まじくたる喜悅の中の悲哀は袖を絞りて惜めども
夕またあびく花の雲の朝の雨よとほぬれて果敢るく散るお異さるす寶ふや老若の別さく無常の
風の誘へばこそ假の浮世といふ哀れさ去れば痛としや摩耶夫人の最惜盛の御身さぐるその係の
うつろとす御壯健ある風情おて自然お眼を閉ぢ果てたまふこそ哀れといふも愚され此有様お宮

中お有合ふ人々ワツとむりり泣伏て腸より絞り出と涙お左右の袂を濡し天も雨もつむりりあ
り此事次々の女中達より次第くお傳へしお帝のおん悲嘆一ト方さるす龍顔お涙を浮べたまひ
「今日の花の宴こそ喜悅され正しく摩耶が名残の爲めは催はせしよ異さるす此上もさき死出の餓
別心を残しぞとうち嘆き吊らせたまふぞ難有き帝のおん坐右は侍べりさる摩耶夫人の姉君橋
曇彌の方の妹が果敢さくありと聞くより裾衣かいあげ無常の間へ走りゆきつゝ空散る身を
震とせて縋り付き面は溢るゝ名残の涙心の中よの過ところ調伏せしより惱みそめて斯く果敢さ
くも成つるウアラ恐ろの我が心や罪さき妹を怨みと天道争で許したまはんと摩耶の魂魄此家
の棟よ止まりあふ今一とび空散る復りてこの姉は詞をかけてまひねと誰の教へり小袖の襟
を端短かよ結びあげ岸破と伏て泣けるを見うねて優陀夷の種々諫むれども尙ほ生体さくこの
まゝ爰も身を失ひ冥土の摩耶は追若て造り罪を懺悔さし天の御罰を逃れんと悶へ焦れて掻口
説と優陀夷の君の仰も事托せ輪曇彌と傍は隔て「其おん嘆のお道理されと今も甲斐さき諄

言後世の菩提を弔らひたまふの何よりの功德よ
候らふイザくおん支度ありて妹君の御供養を
勤めたまへと宥め賺せば女房達も口を添へ夫こ
そ何よりの御善根サ、お起あそむせと勸められ
て橋皇彌の漸やくよて思
ひ返り泣くく月影殿へぞ
歸られたる
是や开も隨
縁眞
如の
功德



みて
悟れ
バ悪
も
とあ
り煩
惱ふ
亦菩
提の
種深
現



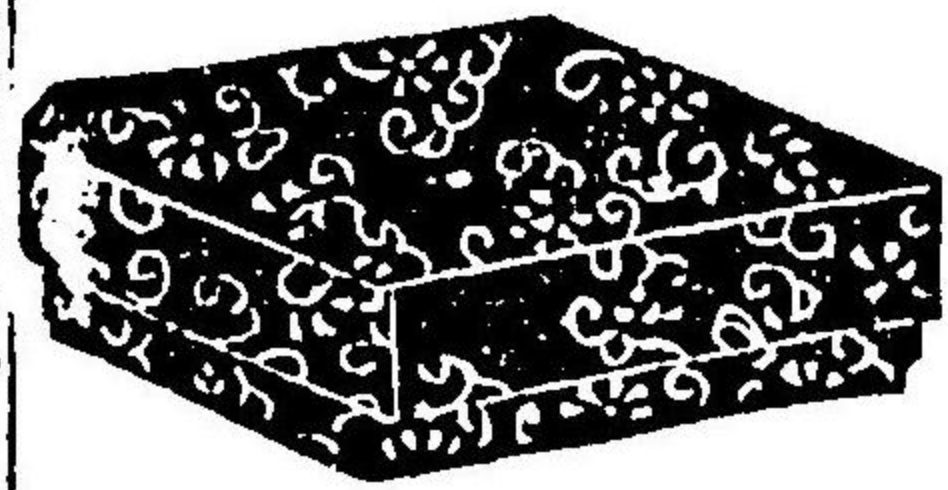
世の罪障も一時の懺悔も消滅して下化衆生結縁あるとくや恚て淨飯大王の摩耶の菩提を營かま
んと白倫子の御服も召換られ一室の内も閉籠り御經讀誦の外ありなるの稍あつて命婦を召さ
れ密に優陀夷へ尋ぬる旨われバ急ぎ此へ招ぐべしと仰ければ命婦の畏み直よか次へ傳達れば優
陀夷のやがて御前へ出で謹んで平伏する程も帝のおん聲を曇らせられ「如何に優陀夷今更如何
よ悔んごとて返らぬ事との云おのり現も果敢みきの摩耶の身の上生あるもの、習ひといへま
だらう若き昔の花の漸やく咲そめし身よわれバ惜む心も一層まさりて斯く亡後を弔らふうち
不圖思ひ出さるの摩耶の此世も在るをり何があ渠が身の上願の筋もありつらん夫等の事も
聞まはしく殊よの又過しころ年を重ねるまで分曉ざる渠が懷妊を訝しく思ひ磨の尋ね遣とし、
このありしとき其方の種々の仔細ありと答へて其趣きの什麼あるとぞ包まず語り聞せよと言
葉静よ問せたまへバ優陀夷の恐るる答ふるやう「さん候らふ過しころ摩耶の方へ給言の趣き
を傳へし節の委しき事今以て奏聞致さす候らへども其節摩耶夫人の仰よの否とよ卑妾の胎内

の物の怪の魅入べきあはれ偏も愛なき王子あり譬へ千劫萬劫を経るとも一度の誕生ましまそ
こと決して疑ひあはれざれと左右の人の口端のうたてさも懷孕と思ふ三歳が間の委細き事情を
親りて書認ためて茲に在りして某甲夫婦へ密々見せ給ひしを拜見しいと尊とく覺えしが楮こ
と此度不測も夢中のおん告も毫も違はれ太子御誕生まませしが摩耶の方の痛とくも既も
果敢なくあり給ひぬ登下坐右も措たまひしかん手函を檢ため見ると以前の御遺書に更なり夥
多の女中達へそれし御遺物分配の事までも認ためおくれし御注意まだうら若きかん身お
て斯まで物お行届きし御眞心の辱けあさを思へばいと悲しき未だ奏聞を扣へ居りしが御尋
問お任せ只今こそ某甲が妻お申付け彼のおん書物を取寄て天覽お入れ奉まつらんと言つし襖の
外へ向き人を喚んどとる程お折よく妻の御佛お供養の花を携さへて行くを呼留め云々と吩咐れ
バ女房の程なく摩耶の手函を携さへ眼も泣腫し惘然と御前へ出て手を扣へ手函の蓋を取除てお
ん遺書の其中も三歳の間悩みたまひし其故由を細々と書綴りしを取出一帝へ捧げまらされ

淨飯大王の取上げさまひ熟々極覽まーまそ
 お始よりして細々とかん身の果敢なき事をの
 み書綴りさまひーくバ帝の素より優陀夷夫婦
 も血涙補み包み兼ねまをー言
 葉も絶けるが稍あつて帝の優
 陀夷も向とせたまひ「コレ見
 よ此の返と書お若もこのまゝ
 相果赤心懐孕あるる病あるる
 ニツ一ツの證明をバ身を裂き
 骨と碎んでありと世も顯とー
 て人々の疑團晴したまへうー是のみ摩耶が上もあさ願は侍り○



◎と書てあり
 如何も哀れと
 思とすやと縁
 返一巻返一書
 遺されー事實
 を残る方なく
 讀み畢りて龍



顔の涙を拂とせたまひ「如何も優陀夷摩耶の死
 骸の猶存生れ体も爲一八葉の車お
 乘坐宮中を送り出とせー偕
 吊らひ埋葬る所の青龍城の
 束ある
 夕陽山
 の風景
 をバ摩
 耶の常
 々愛と
 るゆ○



◎該山の絶頂ふ十六丈の
 寶塔を築と正面に提婆羅樹
 を栽之左

右に蘭毘
 尼恩の寶
 樹と植付
 け青龍城

を傍お移轉して常お香華を絶とておく跡懇切お用らふべしと仰されば優陀夷夫婦の頭を叩げ
 ざりとして厚お御惠み嘸お草葉の影おても此言聞しめそおらば摩耶夫人のお喜悅も若干おらん
 名僧智識の經文よりも嬉しく得脱いよさるべしイヤヤ繪言の趣きと夫々へ申し達せんと即坐よ
 御前を退ぞきて急き準備を整へつ摩耶の死骸野邊送の猶ほ存生の粧飾よて八葉の車よ移し載せ
 帝より次々まで残る方なく香華の手向稍や終りておん供奉よの光明大臣優陀夷を始め百官諸士
 數百人衣服を更よめて之を發護と備又女中の儻輩の優陀夷の女房命婦を先としお側お小性お次
 間お茶の間お仲居お昇お婢よて皆夫々よ役を設け御車よ隨從つゝ順て宮中を除くと運び出で列
 を亂さぬ道次四衢八街よの老若貴賤の隔なく袖を絞りて立集ひ摩耶の車を拜しつゝ孰れも願つ
 ぎ歎くよそ流石よ殊勝の舉動なれ侍て程なく夕陽山の麓近くへ來りければ笙篳篥太鼓の音を揃
 へて音樂を奏しつゝ尙も御車を進むる程よ隨從がよ面々も皆な感涙をせきわへせ牛うつ勝男も
 かくをかり尊ときお方の葬式お結縁とるとの難有さと感嘆されば思とせも鞭を憂理と打捨て短

うき袂を伸しつゝ眼臉を拭ふぞ道理なる去る程よ夕陽山の御陵墓へ漸やく着りければ尊さも卑さ
 も隔なき世の習慣とて是非もなや無常の風お靡くなる幡天蓋も哀れ添ふ葬禮の式終畢り車より
 して御棺を既よ土中へ納めつゝ守衛の役を附置て忌日よの御弔祭香華の手向懈怠なく偕又彼
 の青龍城を追々爰へ引移され贈進とるよ冥加なれ去れば月景殿の轡疊彌の其後心も改たまり
 て摩耶の菩提よのみ心を竭し荷且よも生めきたる氣合なれば命婦の心根を推量りいとさの
 餘り何とぞして親しく帝のわん伽おまぬらせんものと彼方此方を執繕りひておん通とせの
 やうよ媒介たれば帝よも流石哀と覺されて夜のお伽も浮々と酒の延もえげくお去者日々お疎
 ーといふ世の俚諺お違ふとなく摩耶の忌日も程經ていつゝり絶る香花の烟の轡疊彌の胸お焦れ
 帝の寵愛めでよくて比翼連理の契約さへ結び目堅と糸遊の解ぬ中とぞありたるゆゑ次々の女中
 們も喜悅の餘りよの寄擧りて一人寝の身と怨み口善惡おくも叫き合の愛を知らざる宮仕の女子
 の常とぞまふれたる或時淨飯大王の命婦を運て月景殿へ渡らせたまひ轡疊彌と語らひたまふや

て畏まる命婦の手を扣き温和に「御意の趣き長み候らへども摩耶夫人の御遺書の次第もあれバ此儀如何と親へバ「如何ももく其遺書へ記せしものへ勿論洩さるものへも其許達より宜又計らひ得させよか」と残りの方なき恩恵の程優陀夷の女房を以て夫々かん遺念と下し置れ青龍城の女中へ残り残らず御暇を賜とりゆる名残涙の乾うぬうち嬉し涙の嫁入沙汰或は御取姉妹兄弟分の問音信狂言見物月花の遊山も互に世帯なみ夫婦喧嘩の紛糾り重なる妻の數頭これ竟の苦海に沈むもあり愛も辛さも假の世の假の宿も因と果の車の廻り来るものを知ぬが佛の淫奔事慎むべきの限よこそ去程は光陰の水の流るゝ如く昨日と暮れ今日と過ぎ經といふあり摩耶夫人の百ヶ日も過ける小太子のまをく壯健な蟲氣もあつて成人なまひ此頃の愛らあり玉ひいと聞えりバ淨飯王の優陀夷と召され「今日幸ひの吉辰なれば太子お初めて對面せん疾々諸卿へも參内とべき旨を達せよとの仰ありければ優陀夷の畏み其旨を夫々の向へ達せ

いふ月卿雲客百官有司如何も愛なき御事ありと心お勇みて參内ある時お優陀夷の女房の太子を抱き奉まつり玉座近へ進みければ帝の御膝お抱取たまひ實は優いさ面相うお摩耶よそのまゝ生寫といふも却々思ありと心ともかく言掛たまひて「イヤ左よあつて此若宮の母といふの則ち是るる輪廻彌きり忘れても摩耶の子と我も人も言ふべうと此事國中へも御示せよと世々難有き仰を聞より宮中一同只太子の輪廻彌の御腹ありと持離し千代萬代の末までもいよいよますく御繁榮と壽ふき祝ひまゐらせたる輪廻彌の世の聞え旁々以て嬉しき事の此上のとべらじとて帝のかん側近より太子を抱取り左も愛々しく實子の如くお管待たまひ稍あつて乳母を引連れ月景殿へと歸られければ次々の女中の中にも始めて玉顔と拜せしもの「アナ美麗のかん有様や百の媚翠の黒髪艶々しく瑠璃の眉より眼端かけて仁愛の御相顯され如何も艶いさ若宮様と手と打ち囃いさめければ太子の御機嫌うるはしく俱お浮れて愛々氣は天窓てんく手拍子まで日お増て智慧づきたまふを母若の餘念多く取離し侍立らるゝよとや三歳とありたまへば初元結

のかん祝として月景殿にて種々の準備も整のひ既帝へ参
 内の吉日とありなれば御父淨飯女王へ献上の其品々の寮
 の御駒綾羅金劍銀劍玉
 の旂龍障龍旗金銀珠
 玉を取揃へつゝ華美か
 る粧飾を添
 へ官人侍丁
 打ち圍ひ前
 後を護りて
 参内あるその形容を善美あり諸太子の優陀夷夫婦乳母等
 よ侍づられて帳て玉座の前へ進み出で補義正しく見へた



まへに帝殿覽ま〜てかん詞やど〜く一恙
 あふよく成長〜たまひ〜と偏お國の榮千代萬
 代までも限あふ目出〜き例奇り則とち諱を悉
 達太子と授くるぞと仰お従がひ傍ら又控へ〜
 優陀夷の豫て認ためあり〜壽讚の打紙を白木
 作の臺のま〜
 差向ければ差
 介の優陀夷の
 女房押戴かせ
 まぬふせりれ
 俱平伏あ



しておん禮をぞ述べたまふ當下帝再たび宣まふやう「如何に優陀夷承まされ今日太子初元結縁と
 トめの祝事三年の摩耶の忌も果たれば橋邊彌もろとも太子を夕陽山へ誘ふふべいと宣示あり
 優陀夷の委細長より其趣きまかへと橋邊彌へ告知せし「箇の身おあまりて嬉しき仰の祈
 ふても一さびの太子を誘ひ摩耶の墓石へ赴ひき賣て忘れ遺念の成人を口籍小身妻が長らぬ
 事と懺悔さば左のみ執念く怨もわらじと過ふ一日よりこの事の心お掛りて思ひたえぬ帝の
 お心を測りかね如何ゆふんと今日の日まで案トて控へとべりし去との嬉しき仰ありそのおん
 詞の變らぬうちとくく太子を誘ひ申さん夫々のものへ供奉の用意をんそがしてたべと俄の
 御墓參又次々の女中も忙て喧嘩て御供の身粧らへ何のお彼此復ひして長局の毘羅云ばかりお
 一斯て程おく夫々のおん供方も揃ひ御駕輿をお廣敷中ある長廊下まで昇揚しお順て橋邊彌の方
 花美ある粧飾ひて太子を抱き御駕へ乗移りたまへ六尺の婢們力を揃へて徐々昇あげ御支障ま
 でかき出れば男の六尺受取て尙ほ靜やのわかき出と供奉の面々おん優陀夷夫婦を始めとしてお

側にお次お下婢まで列ありて行列正しく俱したてまつる諸夕陽山の境内より蘭毘尼温の花今を盛
 りと咲きとろひ人待顔の梢々も只山彦の音信のみよて花よある身の何さふん就中難面さ色を合
 み咲亂れ一の寶塔の正面ある提婆羅樹の花英の山吹の色よわらねども解語事の叶ぬの摩耶が
 果敢なき亡魂の尙や留まりたまふやと宮守人も袖を濡せし打柄小籠の方より對の挾箱凍々さ
 打物先だてつゝ悉達太子橋邊彌の方御參詣とやめて寶塔の傍へ御駕輿を昇卸しお履物を參ら
 せし小悉達太子の常よりも御機嫌よくさへくと勇みたまふを次々おん手を扣ゆれば如何より
 て振放ちたまひ々んかの提婆羅樹の傍へ直又至りたまひつゝ花の元お取付て戯ふれてゐたふふ
 うち橋邊彌の摩耶の寶塔の前へ跪さづき料なき妹を怨み終り果敢なくありたまひとの今とあ
 りての我が身おのふ我が身を怨みとべるのいと後を悔みし縁言も人目憚かる口の中又提婆羅樹
 又打向ひて「夫れ花の心ありと雖ども折を待得てかく其色を顯せば我が罪科といかおして忍ぶ
 べきアラ懐かしの妹君アラ恐ろしの我心やと懺悔の涙せきあへを袖に餘れる打こそあれ山嵐俄

よ吹起り雨の篠を束ねて突ごとく花と散りて降来れば橋皇彌を始めと一皆々一同取敢ず傍らに
る青龍城へ入るゆゑ附添一乳母も又太子を抱き城中へ入て雨を避んとまぬれども太子の獨り
ひづかりて中々木の元を放れたまらず尙ほ悪阿搖まふを優陀夷の之を見るも見ぬ雨を厭
とぞ走り出で「コハ何故もむづかりたまふ此雨風の烈きおわざく濡て居たまふぞ今も雨
晴れ風止るべ又こゝへ誘ひまゐらせんよイヤ」此方へくと抱き入れんとまづれども中々
も聞入なく尙ほむづかりあがたまふも優陀夷の詞を端くして皆も心強き若君の去る御
心ある印よる三歳の間母君の胎内へ懐孕て終る母上を失ひたまひも既よ此花の下ありアラ
怨めりの此花や疾々渡らせ玉へとて無体も抱きかへつ、城の内ある橋皇彌の御膝へ移り参ら
せて「イヤ此ある母君のお膝下まで遊びたまへと諫め賺せば悉達太子「イヤ」此あるの磨が
母よのましまさせと細き腕も押退て我が母戀へ何處もや在りまほ何科あつて此磨を早くも見捨
てたまひいぞや我こそ磨の母されとこやく告名て見へてたべと橋皇彌の裙も廻り彼方此方の

女中も童とり物狂とく潜然と打泣たまふ有様の如何も不思議と有合ふ人々賞ひ泣つ賺
申して他へ紛らせんとまづれども太子の尙もむづかりあがく「爰何と云ふ處もて主個の名の
何といふぞ聞まほしやと宣まふも橋皇彌のいよく悲しく堪へ兼て絶入るばかり泣沈み何を
心なく太子の尙も袖を取り如何よくと尋ねたまふも橋皇彌の漸くも涙押へて顔を揚げ「その
御心よ快よのうを思さるゝ事のあればこそ去るお尋のあらんや恨ども強面ども今更啣ちのい
たさねごもおん心情的痛しさも申兼たる此處の往時摩耶と云ふものゝ住宮もてはべるか
アレく彼處も美しく翠の花の候らふを御覽あつて戀を晴さのみ愛惚たまふなど橋皇彌の
更なり其餘の者も取々賺し紛らせごも「イヤ」花より景色よりろの摩耶夫人を早く爰へ召て
たまわれど頑是なき仰を聞よりも復も一同興覺て何を答へるものもなければ橋皇彌の温言も
其摩耶と申すものゝ彼なる寶塔の苔の下に住む人あれば却々お召さるゝ事の適ひとべら老異な
事のみ仰せずとも先づ祝義の酒を聞めせと酒食の供御を進むれり太子の不審の面色もて頭と

やをら傾ふけたまひ肚の裏お思すやう今日
の花見お實の母の在る處を聞得たる事の嬉
しこ難有さ時節と俟て晩のれ早かれ必す
尋ねまゐらせんと漸くお思

ひ止まり「去バ彼なる花一
枝誰の折て取らせよとの仰
お俊陀夷の畏こまりいと容
易さ事なりとて一枝を折て

差上れば太子の嬉し氣お取上て是より御手と放
ちたまはせ是なん深き思慮の始原なり之を三歳
の出家といへば三年胎内お在せしゆる五歳の×



△まへ稱と家出

△つりぬ却説お歸館の途次の御乗駕を退けて殘らば附
隨がひまゐらせ御歩行おて月景殿へと静々歸らせたま

ひける去
程お轎
彌の圖
おも太子
の心お實
の母でな
き事を悟
られよ
り何と



く な
快よか臥す
思ふより隔
意の起りつ
侍づくさ
へも疎ま
けれど帝の
手前如何ぞ
と包めを渡

る、強面さの涙の袖を抱かへ、夜責慰さめまらざる。如何なる故、太子の亦動もそれ、佛
間に入り夕陽山より家産ふせ、彼の花房を佛の前なる經机に供へつゝ、幼稚なる手を合せ、何事を
か祈念して伏拜ませたまひけるを、乳母の見るも忌としく、お側へ寄て他々、さ事小紛ら、諫むる
やう、「コレはまゝり若君様まだお年もまわらぬ、異事のみあそむさる、其様事、まだお早い
恐れぬ、御相應のコレ、爰もある鳩車の太子のおん年、既とやお五ツまありたまひ、ゆゑ公家
大臣より参らせ、若様のお手遊、イザ是をお引おそ、母上様のお心をお慰さめあそばせと云
を太子の他所ふる、「喃乳母よ、何いやるぞ世の有様の電光石火、昨日生れて今日の夕の烟と消る
も争はれ、三歳もても五歳もても、身の老先の頼まれぬもの、磨の爰を放れると、思ひもよら
と又掌を合せて返答たま、と折る、橋邊彌の忍び來て、若や摩耶の傍の現、それもまて、若君お見ゆ
るとのあふん、と墓さき事を推測て種々心を惱ま、つゝ、先程より覗ひ居るお乳母の稍傍へ居
寄て、今太子の曰まひ、事云々と告まう、とを橋邊彌の聞取、いよゝゝ涙も忍びかね、袖も餘れるを

かりあり、恁る處へ、光明大帝の宣示を蒙りて、此處へ入來れば、橋邊彌の忙た、く泣顔かくして
出迎へ、「如何お大臣何事の侍る、よやと尋ね、光明手と扣へ、「去ればあり、今日の宣示お、太子五
歳ふあり、玉ひ、ゆゑ、則ち三ツ目のおん祝義冠定の御儀式を仰せ出されて、候らふと、演れ、橋邊
彌の打點頭さ、「オ、夫こそ、その女の簪始といひ、下賤お、袴着の祝義とて、双親あるもの、列坐て
祝ひさ、めくとある、お我が太子の強面さの年齢も、行ぬ、アレ見たまへ、彼の佛間、お終日坐して、只
御佛と拜、たまひ、餘の事の申、上ても、いりあ、聞入たま、と如何お、とせきと、打叩て、大臣も
不審ぬ、お、かん側へ、進み寄れば、太子のとや色を、悟りて、優々、詞を掛たま、登下、大臣謹んで、「
若宮五歳のおん祝義冠定の御儀式を仰せ出されて、候らふと、恭々、演々、演々、夫こそ、身の望む
處、橋邊彌のおん方も、賑喜こびたま、ふべ、急ぎ準備を、たせよと、案お相違のおん、仰是れ、元來
心と詞の表裏、といま、す、千世萬代まで、繁昌の印と、みあ、愧び、たる、願て、吉日と、あり、なれば、
帝を、始、橋邊彌、與書院へ、褥を、設け、月卿雲、客袖を、列、膝、踵を、次て、列居る、形勢、現、お、勇、ま、さ、次第、あり

却つて説悉達太子の御冠 凛々しく衣紋付自づり氣高く見え歩み出たまふ御形粧違まゝさ面
 相の五歳といへば七歳の智慧在りませば席上の舉動殊更に父上を敬まひ従がふ詞の品の現
 尋常人との見えたまはずと皆々恐れ敬まひたる當下帝の太子を近く進ませ「儲もく美々さ
 粧飾かな朕が仁徳は十倍して國を治め民を憐れむと今よりして忘れたまふな初冠の祝義芽出度
 く」と壽ぶさたまへば輪盛彌も木は竹を繼ぐ相性の性得悪き心より祝義の詞を掛られれば何
 とおく移りよりはず他所の視る目も鈍まかりかりき斯ておん祝義も濟々れ帝の太子を誘ひて月
 景殿の御園へ下りたまひ池水は浮べ小舟は乗り帝親から棹さして漕戯ふれたまひければ太子
 も殊の外喜びさめめきたまふ折も蓮の花盛めて其色香の清淨なるを只管愛らるゝゆゑ帝思
 はず涙を催し御心の内と思とやら开も太子の未母頼りくぬ志望の程顯出ぬ斯あふんかと此池
 ん咲蓮を見せたるも果して外の花よりも取分て好む事是れ佛心の萌芽疑ひあり何とぞ此志望
 を止めと只管思ふ心を押隠し「水上の遊戯は是迄あり尙や面白き戲離せん太子を始め女

子們はやく来て頼て舟より上り宮中へ入たまふ話説輪盛彌の過一頃より太子が此世も亡
 母の摩耶を慕ひたまふより如何も辛さを忘れぬ暫し心を慰さむらめ侍女們を敵手と一妻琴
 を弾べ諸ふ所へ太子諸共帝入せられ「コハ面白し今日の祝事の目出ささよ今より酒を始め
 吹組を諸ふて侍女共一曲を調でさせ余が心を慰さめよと仰り嬉しき女中達立騒ぎつゝ種々
 の趣向ある事をしておん慰みも供へられ帝の興も入たまひ其夜の月景殿へ御止宿ありて太子
 の心を勇ませたまふ彼の佛心を離れさせんと氣配たまふ故あるべし

采野ノオ合三頁 五系上之卷

釋迦八相倭文庫二編上之卷

釋迦八相倭文庫二編上之卷終

